

第1章 はじめに

1 研究の主題

不登校や学習障害等を示す児童生徒への援助・指導に関する研究(2年次)

2 研究の目的

生きる力をはぐくむ援助・指導において、不登校や学習障害(以下「LD」とする)等への対応は不可欠の重要な課題です。

平成8年度と10年度の調査によると、不登校等の児童生徒の中に、その援助と指導にLD等への対応を生かせる児童生徒が存在することが分かりました。今年度はその結果を踏まえ、事例研究によって、不登校等への援助・指導にLD等への対応を生かす方法を研究し、その成果を各学校での教育活動の充実に役立てることを目的とします。

3 研究の仮説

不登校等を主訴とする事例において、児童生徒がLD等かもしれないと推測される事例について

- (1) LD等が不登校等の背景の一要因になっている場合がある。
- (2) 不登校等の予防と援助・指導の手だてとして、LD等への対応を生かした方法が有効な場合がある。

4 研究の方法

(1) 事例研究

各教育局について1～2名、小学校または中学校に研究協力員を委嘱し、協力員会議で事例研究を行いました。

(2) 合同研究

平成10年度の調査研究に引き続き、2年次として障害児教育部と教育相談部が合同で研究を行いました。

5 本研究の用語の概念

不登校…………… 病気や経済的理由によらない欠席が年度間30日以上ある場合です。

(本研究1年次の平成10年度の調査もこの日数を基準としています。)

登校しぶり…………… 上記の不登校の基準に達しないが、遅刻または早退の状況から、不登校状態にほぼ等しいまたは不登校になるおそれがある、と判断される場合です。

不登校傾向…………… 登校しぶりと同義です。
不登校等…………… 不登校と登校しぶりを総称する場合に用いています。

L D…………… 全般的な知的発達の遅れがなく、聞く・話す・読む・書く・計算する・推論するなど特定能力の習得と使用に困難を示す状態です。また、生育歴、病歴、医学的・心理学的諸検査の結果等に中枢神経系の機能障害が推定される所見があります。

なお、その特徴のうち学校生活等で見られるものについては、下記の教育資料で紹介していますので参照してください。

教育資料平成7年度第3号「心身に障害のある児童生徒の指導方法-軽度障害児及び学習面に困難を示す児童生徒の状況とその指導-」p.4~6

教育資料平成9年度第3号「学習障害(L D)を含む学習困難な児童生徒の指導方法-事例研究のまとめ-」p.4~17

教育資料平成10年度第2号「不登校や学習障害等を示す児童生徒への援助・指導-調査研究のまとめ-」p.6~30

諸検査の結果等の特徴については、

同上教育資料平成10年度第2号p.40~43を参照してください。

また、本研究の各事例においては、相談機関等がL Dであると判断していない場合でも、生育歴や教科学習での困難の偏り、センター調査項目の特徴等にL Dにつながる情報がある場合は、L Dへの援助・指導方法を活用する方がよいと考え、「L Dかもしれない」「L Dが疑われる」と表記しています。(センター調査とは、教育資料平成8年度第3号「学習障害(L D)を含む学習困難な児童生徒の指導方法-実態調査のまとめ-」記載の調査を指します。)

L D等…………… L Dであると断定できないが、L Dと類似の状態像を示す様々な場合を総称する場合に用いています。

学習困難…………… 記憶、注意集中、発語、計算、書字、推論等学習過程で必要なことに著しいつまづきがあることを表します。

学習不振…………… 学習困難があるために、学年に相応した学習の成果が現れていないことが著しい場合を示します。

6 本書の構成

この教育資料は、援助・指導に関する事例研究のまとめです。「児童生徒への援助・指導をできるだけ具体的に考えるための事例集」としての体裁を重視し、第2章以降については、次のような構成にしました。

すべての状態像を網羅することはできていませんが、援助・指導の方法やそのヒントが得られるのではないかと考えます。

第2章 事例集

事例一件につき見開き2ページとして、できるだけ簡潔にまとめています。

事例の標題は、児童生徒が示す状態像をイメージしやすいように、特徴的な側面を選んで用いました。

事例は、下記の観点で整理しています。

なお、紙幅に限りがあるので、家族の構成や年齢等補足が必要な情報、専門的または詳細な検査結果等は巻末の「事例に関するその他の資料」に記載しました。

欠席等の様子

欠席日数、遅刻・早退回数等で、不登校または不登校傾向の経過を特徴的に示すデータや情報です。

学習の様子

学習困難を示す教科やセンターの調査該当項目の偏り等、LD等への対応を生かす必要があることを示す特徴的なデータや情報をまとめました。

性格や行動の様子、エピソードなど

中枢神経系の機能障害を推定できる生育歴上のリスク情報、不登校等の背景理解につながると考えられる心理的特徴を示す状況及びエピソードなどを記載しています。

児童生徒の理解

不登校等の経過及び学習・性格・行動面の特徴やエピソードなどを踏まえて、援助・指導の方針の根拠となる児童生徒の主な課題を示しています。

援助・指導の方針

児童生徒の理解を踏まえ、不登校等や学習困難に対応する方針を表しています。

援助・指導例と経過と主な担当者

該当児童生徒の不登校等や生活・学習面での主な課題に具体的に対応したものに焦点化し、経過も含めて簡潔に表すように努めています。また、LD等への対応を生かした実践をできるだけ紹介しました。

主な担当者とは、担任等直接の援助・指導に当たった教師だけでなく、事例によっては、組織的な取組の調整者も表しています。

変化と課題

不登校等及び学習困難の改善の様子と残っている課題を示しました。なお、LD等への対応を生かす指導方法の有効性とその活用の必要性を示すことに留意しています。

考察

事例全体について、援助・指導の成果及び課題をまとめました。

該当児童生徒は今

事例の各取組の評価を行う上で参考にするため、現在の様子を示しています。

第3章 事例から学ぶ

Q & Aの体裁でまとめています。

第4章 研究のまとめと課題

資料

1 事例に関するその他の資料

児童生徒の家族、諸検査等の結果などに関する他のデータです。

2 用語の解説

児童生徒の様子とその理解及び援助・指導内容に関連する主な用語については、初出のページにおいて 番号を付け、その順に概括的な説明を(p.34～37)しています。